

関係財が日本の中高年の幸福度に与える影響：  
ライフコースの変動に注目した実証分析

立福 家徳（大阪大学国際公共政策研究科博士後期課程）  
松島 みどり（大阪大学国際公共政策研究科博士後期課程）

要旨

日本人男性の多くにとって中高年期に経験する定年退職とは、人生において最後にして最大の転換期となる。しかし、それが幸福度をはじめとする主観的厚生に与える影響について分析を行うことは、データの制約等から困難であった。本稿は、「暮らしと生活設計に関する調査（中高年パネル調査）1997-2005」（ニッセイ基礎研究所）のパネルデータを利用して、日本の中高年男性の幸福度の決定要因として、特に人と人とのつながりから生産される“関係財”がどのような影響を及ぼしているかに注目して実証研究を行った。推定結果からは、関係財が豊かな人ほど幸福であるという結果が得られた。また、主観的健康観の高い人、現在の収入に対する満足度の高い人も多くの先行研究と同様に幸福度の向上に好影響を与えていた。その一方で、定年退職経験の有無が幸福度に影響を与えるかについて、統計的に説明力を持つ結果は得られなかった。

キーワード：幸福度，中高年男性，関係財